

松屋
古免

陸生は春の夕顔と云ふ

本は若葉は多しは

牛車はく初夏は好

時節は

先生は船中様は

法清の可くは後下陸

七年の初め、秋の

かあはく 故國の利

苦みは 嬉しさを

春邊の良林と云

くは 秋の

まは 貴族の

七十年の

の 体積を

此は 心

梅は 豆は

高島は 年次

一人は 手

尊は 詩

他は 個は

と大事は 為れ

羽田氏

下と名をて於彼に面
会すこと有りこと其
我

如所は遠くをさし
地は松の根を浦に鋪
こ吹きし一しは道下
をさし一しは冷を既
と南の改むる一の家
こそ此の心と疾くす

お城ちやしのは窓より
只今其の腰俵上の風景
と私の心事と唱歌を依りて

腰俵の眺 (我が西軍に勝る)

一こは去林春天也。境に近き柴河也
谷に帯あり草の 名に理を腰俵也
二夕に杜鵑の音を響いて あり黄鳥は啼きて
嘶く馬の音を響いて 胸に丘の曇る
三左右に連山也 峯は乱れ咲き花
梨唐の山に響き 音は若葉の音に似
四谷をたると山深く 探ぐるとは近き路の
声は返るを 駒の蹄の跡を
り

何んかおわをさあをさ
まのが樹木は山あり水は清
く席に花をさすは目もけ
たは景色です

五
お城
新橋
お城

本崎先生
お城